

川系男子の『川と人』めぐり No. 23~久慈川~

坂本貴啓(筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。 川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

♪夏も近づくハナハ夜 野にも山にも若葉が茂る あれに見えるは茶摘みじゃないか あかねだすきに菅の笠 (唱歌『茶摘み』 作詞: 不詳, 作曲: 不詳)

図1 久慈川流域図(常陸河川国道事務所管内図を一部トレースし,筆者加筆)

1. 西の四万十, 東の久慈

2014年4月26日(土),ゼミのフィールドトリップで久慈川に行った.『西の四万十,東の久慈』と対にして例えられるほどアユの釣り人らの間では清流として知られている.

久慈川は八溝山(1,022m)を水源とし、福島県南部から茨城県北部にかけて流れ、日立港付近で太平洋に注ぐ一級河川である。流域面積1,490 km²,流路



図2 現存する四堰と魚道

2. 江戸時代に既に魚道の概念!?-四堰-

最初の目的地は里川と久慈川の合流点付近. 里川 が合流する直前の久慈川に四堰と呼ばれる床固め堰 がある(図2). 宮村(2013)*1によると,この堰は 江戸時代にできた堰で, 江戸時代から魚道のついた 堰であったという. 江戸時代に『魚道』という概念 があって, 魚に配慮した構造物があったということ になにより驚きである. これは私の仮説だが, 久慈 川は当初よりアユ漁が有名で名産として名高かった. そのため,流域の人々はアユの遡上に関心が大きか った. そのため、農業のための水は確保するため堰 をつくっても魚に影響の少ない堰の設計にしたので はなかろうか. 今でこそ珍しくない河川環境への配 慮した土木構造物だが、当時から人々は川の恵みを 多く享受するために自然に対する配慮をよく行って いたということになる. 先人達の久慈川の生き物に 対する視点は現在にも通ずる思慮深いものである.

堰の魚道周辺にはコサギやカワウが数多く集まっていた.集まっているということは魚が取りやすいということだから,魚道がよく機能しているということであろう.

※1・・・宮村忠 2013、川を巡る-「河川塾」講演録-、日韓建設通信新聞社.

3. 久慈川と里川の合流点

久慈川と里川は合流点付近では数kmに渡り、川が平行して流れている。おそらく昔の河道はそうではなかったであろうが、現在は背割堤(図3)となっている。背割堤は洪水が発生した際に両方の河川を安全に合流する役割を果たしており、木曽川と長良川、宇治川と木津川の背割堤などがよく知られている。久慈川と里川の背割堤は車一台ほどが通れるくらいの幅で決して大きくはないが、立派に役割を果たしている。背割堤からは川を挟んで向こう側の堤内地の家々や田植えのために水を張った田んぼが見渡せる。今年生まれた男の子が生まれたと思われる家には命名の旗とともに、鯉のぼりが堂々と晴れ空を泳いでいる。堤防には枯草の中からまだ薄い緑色がところどころに芽吹いている。背割堤からは春の風景



図3 里川(左)と久慈川(右)の背割堤



図4 現在の辰ノロ堰

を凝縮して眺めることができる。最近では洪水対応のため、どうしても高さをあげる築堤を行わなければならないところが増えてきていて、川と堤内地の風景は分断されがちだが、久慈川の堤の高さはそれほど高くは感じない。これは川幅にゆとりがあるなど築堤に治水対策の大半を依存していないから見ることができる風景なのかもしれない。土手風景の中にこそ、日本の美しい川風景はある。

4. 辰ノロ堰と永田円水親子

里川の合流点から少し遡り、辰ノロ堰(**図4**)に到着.この堰は江戸時代に甲斐の国(山梨県)の永田円水親子によって建設された堰である.甲斐の国から寛永十七年に父、茂右ェ門とともに常陸の国(茨城県)に移住し、鉱石採を行っていた.円水親子は鉱山技術とともに土木技術にも優れた腕を持っていた.それを見込んだ水戸藩初代藩主の徳川頼房は親子に治水利水事業に当たらせることにした.円水が最初に手掛けたのが辰ノロの堰であった.工事は難航しながらも正保六年に完成.しかし、いざ水を流してみると河水が地中にしみこんで途中で止まってしまう.そのため円水親子は牢へ入れられてしまう.しかし



図5 久慈川沿いで昼食

円水は獄中にいてもどうして水が流れないのかそればかり考えていた。ある時ついに失敗の原因に気づいた彼は獄中より工事改善の方法を藩庁へ差出し、完成した(常陸大宮市観光協会1981,現地看板より).

獄中でも工事の失敗原因ばかり考えるとはすごい 土木技術者魂である。おそらくこの辺りの地形は扇 状地形の扇央部に当たるため、もともと水が伏流し やすい地域であったため、堰にうまく水が湛水しな かったのであろう。

現在の辰ノ口江堰は可動堰となっており、茨城県が管理している。今も農業用水堰として利用され、周囲の1,130haを灌漑している。

5. 久慈川の河原で

正午を過ぎ、お腹がすいてきたところで昼食.フィールドトリップではみんなで川を見ながら昼食を食べることが多い.今回も久慈川の中流域の河原に座り、昼食をとる.食べ終わった者は好みの小石を見つけては水切りをしたり、河原に石を積んだりして遊んでいる.

ゼミの新入生も普段川の側で昼食を食べるなんてことは中々無いようで、新鮮に感じたことだろう. 大学院から入学してきた一人は異分野から河川の研究室に飛び込んできたが、4月中慣れることに精いっぱいで緊張の糸が張り詰めていたそうだが、川の側で長閑にご飯を食べる研究室のメンバーを見て少し緊張が解けたと言っていた. 『同じ釜の飯を食った仲間』いう言葉ならぬ、『同じ川で飯を食った仲間』というところだろう. 今回新入生は12名中4名が参加していたが、彼らの記憶の中にゼミで訪れた最初の川として久慈川の春の風景が刻まれていくのだろう. 私も今まで様々な川を様々な人と巡ってきたが、今日の川めぐりも大事な記憶として川の風景と巡った人とのやりとりの中で刻まれていくと思う.

どんな新歓飲み会よりも河原でみんなとおにぎりを食べるほうが強い仲間意識が醸成されるだろう.



図6 八溝山山頂と尾根線沿いの分水嶺



図7 八溝山麓の川

6. 久慈川の源流八溝山

さらに久慈川を上流へと遡る. 久慈川の途中から 支流の八溝川の方へ入っていく. どんどん勾配が急 になってきて、山道になってきた. このあたりは春 が遅いのか、まだ桃や梅、桜が咲いており、山郷は 色鮮やかに色づいている. 八溝山嶺神社の鳥居をく ぐり、林道を車で登って行く. ヘアピンカーブを繰 り返しながら,一気に標高が上がっていき,直下を 覗き込むと運転手にドライブの命運を祈りたくなる ぞっとする光景. 順調に山頂に到着し、散策. 八溝 山は標高1,022mの山で茨城県の最高峰である. 県別 最高峰の標高は千葉県に次ぎ2番目に低い. 那珂川流 域(西側)と久慈川流域(東側)の分水嶺(流域界) にもなっており、尾根線でそれをはっきりと確認で きる(図6). また福島県(北側)と茨城県(南側) の県境にもなっている. 久慈川本川は山の北側から 流れ,一旦福島側へ北流し,途中から南流する(図1). 方や八溝川は南斜面から流れ始め、そのまま南流し て流れるため、同じ水源にもつ両河川でも久慈川の ほうが回り込んで八溝山を水源に持つ分,流路が長 くこちらが流域の本川として採用されたのだろう.

山を下り、山の麓の源流域の小さな川でしばし散 策.水はまだ冷たいが、周囲には野花が咲き、山の ふもとにも春が広がっていた(図7).



図8 大子町の川風景



図9 久慈川自然遊歩道と久慈川

7. 大子町の川風景

八溝山を下り、再び久慈川へ. 久慈川を下り、大子町付近へ. 大子町は奥久慈地域の中心で、人口2万人弱である. 町の周囲は山に囲まれ、中心には久慈川が流れており、自然の中に集落が形成されていて、穏やかな川風景を楽しむことができる.

今まで色んな川風景を見てきたが、町の中心部を流れる川として、こんなに美しいところは見たことが無い(図8、図9). しいて言えば京都の鴨川に川風景は似ているかもしれない. 川、河川敷、住宅、山が重層的に重なり合っていて、開放感がある空間になっている. 川沿いには久慈川自然遊歩道と呼ばれる歩道があり、散歩しても気持ちがよく、川に足をつけて遊ぶことができる. まちの中を流れる川としても川幅が大きすぎず、かつ小さすぎず、町の中心部に動脈のように流れるこの川がまちをさらに美しく魅せている.

ここに訪れたのは夕暮れ時であったこともあり、 川面はより美しくみえた.川沿いの八重桜も満開で 季節の彩りを感じられる時期に来ることができ、大 変満足であった.日常的に久慈川を身近に感じなが ら通学できる大子町の子供達がとてもうらやましい.



図10 袋田の滝(2013年10月) 紅葉前



図11 袋田の滝(2011年2月)氷瀑

8. 袋田の滝(参考)

今回、時間の関係で訪問しなかったが、久慈川といえば袋田の滝を忘れることはできない。大子町の滝川(久慈川の支流)にあり、日本三名瀑としても有名である。秋は紅葉と滝が美しく、冬は氷瀑することでも知られる。昔、西行は「この滝は四季に一度ずつ見に来ないと真の風趣は味わえない」といったほどで、大変美しい景勝地である。3回来たことがあるがその時の風景も大変美しかった。今回春風景は見られなかったが、次回ゆっくり訪問したい。

【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)



1987 年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院システム情報工学研究科博士後期課程構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りはプールで泳ぎの練習をすること。